

フィールドに出るといふこと

——歴史学における現地調査の意味——

白水 智

はじめに—フィールド調査の経験

- 一、歴史学と現地調査
- 二、現地調査のもつ意味
- 三、思いもかけない出会いと展開
- 四、フィールドの現在を知る
おわりに

はじめに—フィールド調査の経験

私は歴史を勉強する者の一人であるが、その中では比較的フィールドに出ている方かもしれない。思い返せば、大学三年生のときに、論文や史料で知った福井県の海岸沿いの集落に興味をもち、講義の先生や受講生仲間とともに現地を訪ねたのが、歴史の現場を見に出かけた初めての経験であった。その経験が忘れられなかった私は、翌年には卒

業論文でその地をとりあげようと決め、リュックを担いで一週間弱、あちらこちらを歩いてまわった。市役所を訪ね、教育委員会を訪ね、さらに民宿に泊まりながら海岸沿いを歩き、道ばたで出会った人たちにいろいろと話を聞いた。私にとっては初めての「調査」といえる経験で、まったく手探りの状態ではあったが、現地調査の大切さと魅力を実感したのはこのときだったように思う。

その後、修士論文作成の頃には、フィールドとした長崎県の五島列島に渡り、スクーターを借りて小さな島の中を三日間で百キロメートルほど走りまわった。大学院の博士課程に進むと、今度はアルバイトをしていた神奈川大学日本常民文化研究所の調査プロジェクトに加えてもらい、毎年夏と秋の計十五日間、奥能登に通うことになった。日数や時期に変動はあったが、結局この調査は現在まで毎年続き、すでに十四年目となっている。私にとっては初め

ての集団での調査であったが、異分野の研究者が集う調査のあり方、現地との関係など、この調査からは言い尽くせないほど多くのことを学んだ。さらに、十年ほど前から、大学院の後輩を中心とする若手と山梨県の山村地帯に調査に入るようになり、⁽²⁾ そのほかに個人での調査も含め、年に幾度も出かけるスタイルが続いている。

ここでは、これら多少の経験から、日頃現地調査について考えていることを書いてみたいと思う。なお、関係する現地に赴いて行う調査を広くフィールド調査と呼んでもいいが、必ずしもフィールド（野外）で行うわけではないので、適宜「現地調査」と呼び直しておく。

一、歴史学と現地調査

近年でこそ絵巻物や石造物などの「非文字史料」を利用した研究も一般化してきたものの、おおむね歴史の研究は、文字に書き残された史料（文献史料）を素材として行われてきた。研究のスタイルとしては、活字化されたり写真版・影写本として残された古文書や古記録などの史料をひたすら読み込み、分析する、というのが一般的な手法であり、調査地に向いて資史料を集めるような作業は誰も行おうわけではない。もちろん、旧家などに残された在方史料を自ら発見・調査して研究することは近世史研究で

はしばしば行われているが、そうそう未発見の新出史料があるわけではない中世や古代などの古い時代、あるいは行政関係の基礎史料を役所などの機関が作成・保存するようになった近代以降を研究する場合には、必ずしもフィールドに出る必要は多くない。その意味では、フィールドでの資料収集が前提となる民俗学などとはかなりの違いがある。

もつとも、中世史の分野でも一九五〇年代頃から荘園の現地調査が行われるようになり、ことに著名な荘園には各地の研究者が次々に訪れては独自の調査をしていくようにもなった。この動向は現在でも続いており、とくに圃場整備などによって旧来の耕地形態や水利状況が破壊・改変される危機感から、その前にそれらの情報を収集し、記録に残しておくとする活動は重要な意味をもっている。⁽³⁾ そして調査に際しては、耕地に付された小地名や地域にまつわる伝承、現在まで続く祭礼、家ごとの家号などにも関心が及び、そうした情報があるか時代を隔てた中世の史料を解読するのに役立つこともしばしばあった。しかし、現在までにそれなりの成果を収めてきた荘園調査は、ほとんどが団体による組織的な調査であり、個人での現地調査は必ずしも一般的に行われてはいない。基本的には、古代史や中世史の研究に際して、扱った史料に関わる現地を誰も訪れるというものではないのである。

一方、前述したように、歴史学の中で最もフィールド調査の実績を残してきたのは近世史であろう。近世史料は未だに無数といつてもいいほどの量が各地の旧家や寺社、あるいは地区の共有文書などの形で残されている。いわゆる地方(じかた)文書といわれるものである。これらは地域研究の重要な素材として一般的に利用されてきており、団体以外にも個人レベルで調査も行われてきた。近年は、史料探訪時の現状を記録することの重要性が広く叫ばれるようになり、近世を中心とする在方史料をきちんと記録をとりながら整理していこうとする団体がいくつもあるが、個人レベルではなかなかそこまで徹底しないのが実情である。また、一般に「地方離れ」とも言われるように、地域に残る史料を探索し、それをもとに研究を進める手法はあまり「はやらなく」なつてきている。そして、在方の「文書」の調査はしても、伝承・地名の聞き取りや地域の文化財の調査などには関心が向かないケースもよくある。その地域への総合的な関心というよりは、文字の書かれた紙史料のみを追い求めるような傾向もある。その場合はフィールド調査というのとは趣が異なるといつてもよい。

二 現地調査のもつ意味

私自身は、これまで中世・近世に関わる海や山の問題を

研究のテーマとしてきているが、なるべくとりあげた現地を訪れるようにしてきた。それは、何よりも舞台となる土地がどのような環境・景観の中にあるのかを知りたい、という衝動に駆られるからである。

史料にあらわれる人々の活動や相論(訴訟)は、その土地土地の環境と深く関わりあつてることが多い。その土地で行われてきた制度や慣習、闘われてきた紛争、あるいは信仰のかたちなどもろの事柄は、その場所に暮らす人々の日常の生業・生活活動に規定されるのが常であり、その生業を決定づけるのがその地をとりまく環境である。海に面していて平地が少ない集落ならば、必然的に海を最大限に利用した生活が営まれるし、山中の傾斜地に開かれた集落ならば、山の森林資源・動物資源・鉱物資源などを生かした生活を展開することになる。たとえば林業が重要な生業となれば、材木の伐採・運搬に適した労働編成や家どうしの関係が構成され、作業の無事を祈り、木を伐らせてもらう感謝の意味から山の神への信仰が篤いものとなる。集落どうしの紛争も、その内実は日常の生業活動を危機から守つて維持しようとするところに起因することが多い。とすれば、その土地のすがたを実際に見ておくことは是非とも必要なことのように思われる。もちろん地震等による歴史的な地形の変動や、生業活動の変遷にともなう開発の痕跡等は十分に考慮しながらではあるが。

ところで、制度的に作成される古文書は、往々にして地域の特性を覆い隠し、広い地域を平準化して見せる特徴がある。近世に全国を通じて行われた石高制などはその典型といえる。例外的に石高のつけられなかった地域もあるが、ほとんどの地域では、租税賦課基準となる米の高を土地(村・個人所持地など)ごとにつけてきた。これは一面比較検討するには便利であるが、しかし日本の地理的環境が海に囲まれ山に覆われる複雑な条件にあったことから考えると、必ずしもその土地土地の実際の生産や生活を反映したものにならないことは明白である。つまり米作の行いにくい海辺や山間地に関しては形式的な評価になりがちということである。平地にしても、米作よりも畠作中心の地域や、農業の他に他の生業を組み合わせて生活を成り立たせている地域など、その内実は多様だったはずである。日本の為政者が支配制度としては「農業指向」であり、「農」あるいは「耕地」(とくに水田)をもって掌握・課税の根幹にしようとしていたことはこれまでも指摘されてきたところである。⁵⁾しかし、形式上の「農」を中心とする世界と、現実の生活の世界は自ずから異なっている部分が大い。とくに数々ある海辺の村や山間の村などでは、石高はまったく便宜的につけられた形式的な数字であることが多く、その地域の生活の質を云々する参考には必ずしもならない。

たとえば、静岡県大井川の上流に井川という地域があるが、ここは江戸幕府成立後七〇年以上を経た延宝四年(一六七六)になって初めて村高が設定されている。しかも、その高はまったく形式的なものであって、支配役人から事務計算上都合が悪いからつけるようにと命じられ、それまで金納してきた税額を参考に、一両あたり五石の計算で無理矢理石高をつけたものなのである。⁶⁾もちろん検地や石盛などの手続きを踏んだ結果の数字でないことは明らかである。しかし、この井川について、稲作に依存する生活基盤をもつ平地型の価値観をあてはめ、古文書に書かれた石高の数字を鵜呑みにしたならば、そこから導き出されるのは現実の生活と乖離した空しい歴史像でしかないだろう。井川は険しい山奥の地域であるが、それゆえに山地資源に恵まれ、それらを利用した多様な生活が営まれてきた。ここが平地の価値観ではかれる場所でないことは、周囲を深い山に囲まれ、山の資源を生かしながら生活してきた環境を実際に目で確認することによって一層明らかになる。現地を踏むことは、平地も海辺も全国均一に表現する文書史料の「平準化作用」とでもいうべきものから、地域の視点をとりもどす役割をもっているといえる。

まずは史料にあらわれる現地がどのようなところなのか、景観をはじめとするさまざまな情報を集め、文書史料の読みとりを確実なものに近づけていく意味でも、現地調

査はおおきな役割を担っているといえるだろう。

三、思いもかけぬ出会いと展開

現地調査の有効性の一つに、予想外の出会いや展開のあ
ることがあげられる。初めてのフィールドに出かけると
き、もちろんここを訪ねよう、これを確認しようというも
くろみはあるが、あまりスケジュールをいっばいにせず、
ある程度余裕をもって日程を組むようにしている。調査先
ではだれか人を紹介してもらったり、新たな史料に出会う
ことが多く、急遽そちらに出かけることになるケースもま
まある。出かける前にどのような展開になるかわからない
から「予想外」なのであるが、しかしこの「予想外」の事
態はたいい出かけるたびに発生する。その意味ではあら
かじめ予定された「予想外」ともいえる。こうした経験は
今までに数え上げればきりがないほどある。そしてこのこ
とが現地調査の最大級の醍醐味であり、魅力でもある。

江戸時代に武士の正装とされた衣装に袴があるが、仕立
て直す際にその裏張りとして貼り込まれた断簡の古文書を
見出したことがあった。この文書について調べに長野県飯
田市に出かけたこともある。全くの切れ端だった古文書か
ら名字とおぼしき文字が読みとれたのを幸に、それを明治
時代の呉服屋か仕立屋を示すものにちがいないと考えて、

ほとんど何のあてもなく出かけてしまった。このときは、
現地に着くと、まず電話帳を手掛かりに片っ端からそれら
しい家や店舗を調べて訪ねてまわったのである。この時
も、訪ねて行ったある家で、屋号は異なるがその名字の人
が経営している呉服屋があると教えられ、急遽手土産を買
って訪ねていった。まったく場違いな闖入者であったにも
かかわらず、店の方は丁寧ないろいろ教えてくださったう
え、明治生まれで今も健在の職人がいるからと、その家ま
でも紹介していただいた。早速また手土産を持って教えら
れた家をお訪ねすると、主は九五才の高齢でありながらた
いへんしっかりとした老人で、古い記憶をたどりながら他
の若い人では絶対にわからないあれこれを懇切に教示して
くださった。この調査は、それこそ何がわかるのかわから
ない、まったくの手探り調査であったが、それなりに時代
背景のようなこともある程度わかり、とりあえず報告とし
てまとめることができた。⁷⁾

山梨県の早川町という山深い地域をフィールドに、私は
仲間と「中央大学山村研究会」という会を組織し、ここ十
年ほど調査を続けているが、そこで探訪した古文書の中か
ら「野州河股山」への出稼ぎに関する史料が出てきたこと
がある。材木の伐採を請負った早川の者が現場の伐採事務
所にあたる会所から受け取った文書で、物請負金額から約
五ヶ月の間にかかった諸費用を差し引き、最終的に手当を

精算した書類であつた。⁽⁸⁾ 他から早川に林業稼ぎに来る出稼ぎの事例はいくつか知っていたが、このように早川の者が外に出稼ぎに行っていたことを示す史料には出会つたことがなかつた。関連文書もない孤立した文書であつたが、なかなか文書にはあらわれにくい他国稼ぎの実態を知る興味深い史料であつたため、出稼ぎ先の現地に行けば何かわかるかもしれないと期待を抱くようになった。もし現地に、甲州から出稼ぎの者が来ていたとの史料でもあれば、より具体的にその実態も知られるであろう。

野州河股、現在の栃木県塩谷郡栗山村川俣の地は、温泉の湧く山間の静かな観光地である。家族旅行の計画を練っていた時に、以前から興味を持っていた川俣を思い出し、まずは温泉につきながらどのような所なのかを見に行く計画を立てた。出かけたのはまず全くの私的な観光旅行としてであつた。しかし、実際に現地に着いてみると、じつとしてはいられなかつた。宿の主人に当地の歴史の話聞き、そのうちについていつもの癖が出て、家族のことは放り出し、それならば古い書き物をもっているお宅などありませんかと尋ねてしまった。結果的に、偶然にも宿の主人と同級生で教育委員会に勤務しているという方を紹介していただき、とうとう古文書の所蔵者を教えていただくことができた。

後日、古文書所蔵者のお宅を訪問し、行李に五個・木箱

一個・段ボール箱一個の古文書を拝見させていただいた。すでに栃木県立文書館によって簡単な目録が作成されており、それによりながら調べたところ、残念ながら甲州から出稼ぎに関する史料は見出し得なかつた。が、そのかわりに同じく江戸時代、川俣に出稼ぎに来ていた他国の職人に関する史料を三点発見することができた。柚とか日雇とよばれる材木の伐採や運材に携わる職人たちは、甲州のみならず、遠く隔たった飛騨国・信濃国からもはるばる出稼ぎに来ていたのであつた。しかも、そのことを語る史料は、やってきた職人たちが不幸にして川俣で病没したために、その事後処理に関して作成された文書であつた。江戸時代の川俣の集落は現在ダム湖の下に沈んでいる。集落の移転をはじめ、幾度も危機をくぐり抜けて現代に伝えられた数少ない古文書の中に、他国から出稼ぎに来、そしてたまたまこの地で亡くなった職人についての史料が残されてきたのである。おそらく全体から見ればほんの一部が伝えられたにすぎないこの文書群に、三点もの出稼ぎ史料が残されているということは、その背後に相当数の出稼者のいたことを物語っている。山村の開放性、あるいは交流の広さというものに関心をもっていた私としては、これら出稼ぎ史料の発見はたいへんに興味深いことであつた。⁽⁹⁾ そしてこの文書との出会いも、予想外の展開によつてもたらされたものであつた。

さらに、前記の山村研究会では、いくつかの集落から、失われたと思われる史料を発見したこともある。早川町の樽坪という地区では、二度の大火に遭い、区有の古文書はないといわれてきたが、それが神社の梁の上上げられていたのが見つかったし、同じく大火のために古文書の類はないと言われてきた塩之上地区でも、個人宅と寺から古文書が発見された。見つかつてみれば、地元の方々にとっては、あああの箱に入っていたのが古文書だったのか、という程度のこと、誰も一切知らなかったわけではなからうが、少なくとも表向き調査の対象になつていなかったものが、はつきり地区の、あるいは個人の文化財として意識されるようになったことだけでも、調査に入った意味はあつたのではなからうか。ちなみに樽坪区有文書は、整理後、区の方で専用の桐箱を作成して収納していただいている。

このような偶然に恵まれた事例は枚挙に暇がない。研究室にこもつていては絶対にめぐりあうことのないさまざまな人とのお出会い、思いもかけない展開が研究に予想もつかない進展をもたらしてくれることもある。行かなければわからない出会いのあること、現地に出向く意義の大きな一つがここにあると思われる。

四 フィールドの現在を知る

現地調査では、現在その土地に生きている地元の人々とさまざまな形で接することになる。これは一般的な机上の研究と大きく異なる点である。現地へ行けば、古文書の所蔵者など、歴史的対象の当事者の子孫にあたる人々、あるいは直接の子孫でなくとも、研究で取り上げる村の現在の住人と触れあうことは当然である。これを煩わしいと感じる研究者もいるかも知れない。しかし、ここにもフィールドを歩く醍醐味がある。

もちろん現地と関係をもつということは、メリットばかりが目立つわけではない。まず表面的なつきあいは成り立つても、より深い関係に進めば全く異なつた対応が待っている可能性がある。また、地域の人々どうしの感情も、人間関係の濃密ないわゆる田舎であればあるほど、よきにつけ悪しきにつけ深いものがある。外部から入つた研究者が地域の対立劇などに巻き込まれたり利用されたりすることもありうる。場合によっては、その影響で、研究上の成果が自由に書けなくなることもあるのである。逆に言えば、表面的な調査のみをもとに史料を理解しようとしても、地域の本当の姿は見えないということになる。調査は、常に自己のスタンスを考え続け、地域からの情報を客観化さ

せ、自問自答を繰り返しながらの作業といつてもよいのではないだろうか。調査のむずかしさはその点にある。

次に調査のメリットについても考えてみたい。歴史学の研究素材は、ほとんどの場合、過去に書き記された文献史料であるから、通常はその史料を通して過去の事実を掘り起こしていくのが研究の一般的な手法であり、(近代史の一部や現代史を除けば)当事者に関わる人間と接触をもつ機会はとくに必要とされない。差別問題など、現代においても当事者を傷ついたり、不用意な発言に対して責任追及がなされる分野に関して、研究者は非常にデリケートな心遣いをして、史料の解釈や扱いにはミスのないよう神経質になるが、そうでない分野については、はるか過去の当事者や関係者が目の前に現れるわけではないので、よくも悪くも気遣いなく自己の見解を述べることができるといえる。しかし、現地調査をしている場合には、そう単純には割り切れないことがよくある。

私たちは、その土地に生きる現代の人々を知り、その立地環境を目の前にすることによって、直接の研究対象がたとえ前近代であっても、その時代の生々しい人間の生というものの―その土地での労働の姿や、人間どうしの社会関係、対立や闘争といったもの―を身近に感じるようになる。もちろん現代と過去の時代とはさまざまな面で違うのだから、今見たものをそのまま昔に移しかえても本当の歴

史像にはなりえないのだが、それでも、たとえば、この自然環境の中でこのような生身の人々が闘争しあったのだ、とか協力しあったのだという感覚は、歴史の想像力として必要な意識なのではないかと思う。史料を読むにも「人ごとではない」という真剣さが加わる。今の世に生きている人間が誰も直接に接したことのない過去の時代を研究する場合、とすれば「おとぎ話」の世界のような感覚で研究に取り組むケースがあることはおそらく否定できないだろう。とくに、自分の郷土の問題を探るわけでもなく、単に活字の史料集から見知らぬ土地の過去に起きた事象を扱うような場合には、「本当のこと」を知りたいというよりは、表面的な史料解釈でも「論文らしい」筋の通った文章を作り上げたいという命題が先行する場合もありうるし、頭脳ゲームのような意識で史料を操作することもないとはいえない。もちろん現地調査に赴かなくとも、きちんとした研究が行われる場合が大半である。が、場合によっては、もし過去の当事者が聞いたら目をむくであろうと思うような論文も生まれる可能性がある。

その意味では、たとえ時代関心は違っても、現代のその土地の人々と接するということは研究に一定度の緊張感をもたらず効果があるといつてもよい。そしてまた、その土地の現在を知ることが、自己の関心をもつ時代と現在とをつなぐ中間の時代にも自ずから目を向けることにもなる。

あの時代の何が變つて何が變らなかつたのか、そしてどのようにして現在に至つたのか、たとえば近世に関心があるとしたら、現在と近世とをつなぐ近代や戦後の時間というものにも関心が芽生えることになるのである。歴史を研究する者は、決して自分と無関係な異次元の「おとぎ話」として歴史を弄んではいけないのではないか。このようなことを考えるようになったのも、いくつもの現地調査を通じてであつた。そして歴史を単なる自分と無関係な他人事とは思えなくなつたし、「現在」への意識なくして歴史学は成り立たないことも実感するに至つた。

関連していえば、今の現地を知ることとは、その土地が現在抱えている問題を知ることにもなる。近年山村の研究を専らにしている私の場合は、過疎や観光の問題が大きな興味関心である。同じ山村でも、比較的観光客も多く、地元の人々もある種の自信をもつていて活気のある所と、そうでないところがある。同じような自然条件でそれほど差がないと思うところにもかかわらず、なぜこうした違いが出るのか、ずっと気に懸けていた私は、最近一つの仮説を描くようになった。それは前者が山の豊かな資源やそれに基づいた生活意識を、現代風にアレンジしながらもそのまま活かし続けているのに対し、後者は山というものに背を向けつつも、平地的生活へも転換しえない中途半端な状態にあるという違いのゆえではないかという

ことである。つまり山に囲まれた所与の環境を肯定的にとらえるか、平地的価値観から否定的にとらえるかの相違と言い直してもよい。この要因がどの程度の比重を占めているのか、またこの仮説があたっているかどうか、まだ定かではない。ただ、過疎という現代の問題を頭の片隅に留めていたことによつて、かつては活気をもつていた過去の山村の歴史的な姿について多少とも考えを進めることができたのは事実である。

おわりに

地域を知ることのデメリットを認識した上で、しかしそれでも私は現地調査の意義は大きいといいたい。簡単にいえば、現地調査をし、その土地と深く関わることは、歴史についてより深く、より広く考えるきっかけを得ることになるといえるだろう。

小さな地域にのめり込んで調査をし、研究をするということは、一見地域という枠の中で小さな発見をして満足する矮小な研究という印象を与えるかもしれない。あるいはそのような意識しか持つていなければそれで終わるかもしれない。しかし、たとえ一地域の狭い歴史であつても、その土地をよく理解することによつて、逆に普遍化した問題意識を見出し、深化させることは可能であるし、逆にそう

した一地域の徹底した調査・研究からしか出てこない新たな視覚や課題というものもあるのではないかと思う。国家レベルで見れば平準化された支配制度によって全国が覆われてしまっているように映るが、その実、いつの時代でも地域はそれぞれ個性的な特性を内在させているものなのだから。

まずはフィールドに出かけようではないか。

注

(1) 調査の内容と成果は、神奈川県日本常民文化研究所『歴史と民俗』二号以降毎年掲載されている。また、研究・調査の成果は『奥能登と時国家』研究編1(平凡社・一九九四年)・『同』調査報告編1(平凡社・一九九六年)にまとめられている。

(2) 現時点までの調査の内容と成果は、中央大学山村研究会『中央大学山村研究会報告集』一号、九号として刊行している。

(3) 近年では紀伊国荒川荘や若狭国太良庄などを調査している東京学芸大学日本中世史研究会の事例(成果は同会より報告書として逐次刊行されている)や、西紀・丹波町教育委員会を中心とする丹波国大山荘の調査(同じく報告書が刊行され、調査全体の成果については大山喬平編『中世荘園の世界』思文閣出版 一九九六年としてまとめられた)、また筑波大学

中世史研究会による播磨国大部荘の調査(成果は同大学日本史談話会『日本史学集録』一〇、二〇号に掲載)、立教大学藤木久志ゼミによる紀伊・越前等諸荘園の調査(成果は藤木久志・荒野泰典編『荘園と村を歩く』校倉書房 一九九七年)にまとめられているなど、数多く行われている。

(4) よく知られているところでは、房総史料調査会や甲州史料調査会が現状記録の採録と原秩序尊重の調査法を早くから行っている。吉田伸之「現状記録の方法について」(『紙魚の友』九号・房総史料調査会・一九九〇年)、西田かほる「甲州史料調査会の活動について」(『地方史研究』二四六号・一九九三年)。

(5) 網野善彦氏の一連の著作には幾度も指摘がなされている。最近では同氏『日本の歴史00 日本とは何か』第四章(講談社・二〇〇〇年)など。

(6) 「静岡市史 近世史料」所収「海野忠良家文書」一〇号(静岡市・一九七五年)など。

(7) 拙稿「衣服の中に隠された古文書」(中央学院大学人間・自然論叢)一二号・二〇〇〇年)。

(8) 水野定夫家文書 第一次一六一号。

(9) これらの文書をめぐる問題については、拙稿「山村の潜在的経済力」(中央大学山村研究会報告集)八号・一九九九年)で詳しく述べた。

(しろうず さとし・歴史学)